

A Streetcar Named Desire

星麻衣子

ブランチが「欲望」という名の電車に乗り、「墓地」で降りて「楽園」と呼ばれる下層地区に着くところから物語は始まる。南部の大農園の娘で上流階級の出であったブランチだが没落し資産を失い、妹ステラを訪ねニューオーリンズへやってくる。彼女は南部の誇りと華やかな過去にすがりつき貴婦人を気取るが、そんなブランチをステラの夫スタンリーは気に入らない。ブランチもまたポークランド系移民の子で機械工場で働くスタンリーに対して差別意識を持っている。老いていく女性の焦り、虚栄心、狂気など極限の不安の中ですべてを失ったブランチには「発狂」という絶望的な道しかなかった。最後は、紳士が自分を迎えに来たという幻想を抱いて医師と看護婦に精神病院へ連れて行かれる。

私が初めてこの作品を読んだとき、人間の残酷さや醜さが強烈なまでに描かれているにも関わらず、不思議と嫌悪感のような感情は持たなかった。むしろブランチ、スタンリー、ステラ、この3人は私の中にも少なからず存在していて、時には彼らの持つ醜さに共感さえした。これが私がこの作品を卒論のテーマとし、研究しようと思った動機である。

まず、第一章ではブランチ、ステラ、スタンリーそれぞれについて reality と illusion という観点から見ていく。光と影、生と死、経験と教養などあらゆる概念に対して正反対にあるブランチとスタンリー、そしてその中間の立場にいるステラ、この3人の位置関係を明らかにすることを目的とする。

第二章では、原作とエリア・カザン監督によって映画化された作品とを比較する。映画化するにあたって内容が変更された点が大きく3点あるが、これらは意図的な変更ではなくプロダクションコード（当時の厳しい映画規制）による義務的なものだと分かった。この変更に対する作者と監督の対応・工夫からこの作品の主題を見てとることができる。